



国経研だより No.85

国際経営研究所

〒220-8739 神奈川県横浜市西区みなとみらい 4-5-3

みなとみらいキャンパス 11007

TEL 045-664-3710(内線 4100)

Contents

- P.1-2 簿記・会計とともに三十年—私の来た道—／中野 貴元
- P.2-3 転機は教室から／早坂 めぐみ
- P.3-4 歌と歌文化からみる東アジア／曹 咏梅
- P4 国経研からのお知らせ



簿記・会計とともに三十年—私の来た道—

中野 貴元

本年 4 月に着任いたしました。大学卒業以後、上場 3 社および上場子会社 1 社で財務・経理業務に従事し、直近では経理教育を推進する公益法人で勤務しておりました。アカデミック・キャリアは初めての経験であり、慣れぬ環境に戸惑ってばかりおります。どうぞよろしくお願いいたします。

私の研究テーマは会計の歴史です。中でも日本に複式簿記が上陸した明治期以降の会計に関する学説・制度・教育・実務の研究を行っています。近年は特に、皇室や神社といった日本固有の制度であり文化である非営利組織の会計史に取り組んでいます。

私が簿記に初めて触れたのは高校でした。当時 7 年先輩であるサンドウィッチマンはまだ世に出ておらず、かつて硬式野球の強豪校であった伝統という名の栄光の残滓を色濃く残した母校を志したのは、霞を食っては生きていけない貧乏田舎神主の倅として、少しでも早く手に職をつけたい——という切なる願いからでした。

当時は、Windows95 がリリースされ、インターネットが普及し始めていた頃でした。これから職を得るならパソコンスキルは絶対に必要となると強く信じており、「高校ではプログラミングの勉強をするのだ」と青雲の志を抱い

て入学します。

春の部活見学時期にコンピュータ部の入部届を片手に廊下を歩いていた途上、五分刈りに薄茶色の眼鏡をかけ、田中邦衛と阿藤快を足して二で割ったような風貌の教師と出くわし、発せられた港町特有の強いなまりに訳も分からず、半ば強制的に連れ去られたのが簿記部の部室でした。

そもそも算数嫌いであり、中学の進路希望調査でも「商業高校でパソコンや”簿”記を勉強したい」と書いて担任に叱られた程度には簿記に興味を抱いていませんでした。ところが、古豪の網元のような迫力をもった簿記部顧問は、その翌朝に私の担任に話を通し、断る間も与えずに入部を既成事実化しました。逆らうこともできずしぶしぶ入部した訳ですが、幼少期より光栄のシミュレーションゲームに親しんできた私は、簿記の問題を解く毎に、経済活動を表すパラメータがくるくると変わっていく様に面白さを見出し、その後一気にのめり込んでいきました。

卒業後は専門学校へ行って税理士になろうと、地元の専門学校を見学して回っていましたが、大人の事情と思惑が複雑に交錯した結果により、大学へ進学することとなります。

入学試験で初めて訪れた時に目にしたのは、

駅舎を出てキャンパスの立つ小高い丘へ向けての登り道があり、その道の左右には山肌にそって学生向けのアパートが並ぶのみで、その他は本当に何も無い。晩秋の寒風吹き荒ぶ中で「なんという所に来てしまったのだろう」と思いました。

それでも何とか必要単位を揃え、大学生活の締めくくりに指導教官と相談して取り組んだ卒業論文では、本学の創設にも深い関わりを持つ太田哲三の学説を通して、戦前期の日本の会計制度について取り組みました。ここに私の会計史研究が始まります。

その後一般企業に就職し、パワハラやモラハラという言葉が未だ存在しない時代に揉まれ

ながらも、研究報告の機会をうかがっていました。そのような中で出会ったのが、本学の名誉教授であり、会計史研究の大家である西川登先生です。西川先生と初めて面識を得た折に会計史研究に関心があるという話をすると、西川先生が主宰されている勉強会に呼んで頂き、以降会計史研究の方法論や観点など貴重なご指導を頂く機会に恵まれました。

太田哲三学説や西川登先生との出会いをはじめ、本学とは不思議なご縁が幾重にも重なり、今、こうしてこの場に立っています。これまでの様々な出会いと縁に感謝しつつ、本学で研究と教育に尽力していきたいと思っています。

(所員／なかの・よしもと)

転機は教室から

早坂 めぐみ

今年3月下旬、高校時代の同級生がNHKの医療番組「総合診療医ドクターG」に出演しているのを目にした。地元の仙台医療センターで医師として働く彼女は、番組内で先輩医師として研修医たちを堂々とリードし、カンファレンスを通じて病名を導き出すサポートをしていた。その姿は実に見事であったが、佇まいは高校時代の優美な友人のままである。自分の道を極め、第一線で活躍する同級生の姿に、私は深い感銘を受けた。同時に、新年度から神奈川大学という新しい職場に赴く私自身は、ここでどのように働き、貢献できるだろうかと、改めて身が引き締まる思いがした。

思い返せば、私の人生の転機はいつも「教室」という場所やその周辺にあった。冒頭の友人と出会った高校は、公立女子高として日本で初めて理数科を設置した学校だった。まだ「リケジョ」という言葉すらない時代。「日本初」の響きに惹かれて迷わず受験したものの、入学してみると、そこにいたのは我が道を行く個性的な生徒ばかりだった。お互いの個性を尊重し合う楽しくも刺激的な日々、そして研究者のように自由な先生たちに囲まれながら、「学校とはなんてカオスな空間

なのだろう」とワクワクした。女性の自立を重視する校風のおかげで、経済的・精神的自立は私の人生の重要なテーマとなった。そして何より、この理数科に身を置いたことで、皮肉にも自分には理数系の適性がないという決定的な気づきを得たのである。

その後、親の勧めもあって経済学部に進学した。学部時代、A.O.ハーシュマン『離脱・発言・忠誠』の訳者である矢野修一先生のゼミナールに所属しながら、教職課程で教育学を学んだことが次なる転機となり、私は教育社会学の世界へと関心を寄せるようになった。大学生活の傍ら続けた学習塾でのアルバイトは、教育の商品化や市場化という問題に対する研究関心へとつながっていった。

塾の教室で繰り広げられる生徒や保護者、先生たちとの生身のやりとりは、単なるビジネスとして割り切れるものではなかった。そこには、塾という存在への批判や肯定といった単純な二項対立では測れない、確かな「教育の営み」や温かいコミュニケーションが存在していた。教育産業が持つ功罪の狭間で揺れ動きながらも、この教室

という空間が持つダイナミズムに魅了されたことが、私を研究の道へと本格的に歩ませる原動力となった。

現在、私の息子は小学校 1 年生である。先日、学校公開日に授業を参観する機会があった。私の住む川崎市は子どもが多く、少子化を感じさせないほど活気にあふれている。息子の学年は 4 クラスあり、廊下に沿って教室が並んでいた。普段は学校現場でのフィールドワークにそう簡単に出向くことはできないので、母親としての「役得」を活かし、ここぞとばかりに 4 つの教室の様子を観察してまわった。

1 組は、元気な学年主任の先生のクラスだ。児童たちが算数セットの時計を手にとると、先生は児童に「時間は誰が決めるの?」と元気よく問いかけた。「なんと哲学的な問いだろう!」と驚い

たが、先生の答えは「時間は時計の針が決めるんだよ」という明快なものだった。隣の 2 組では、先生が黒板に向かってひらがなの「た」の書き方を教えていたが、教職課程を担当する教員としては、つい「児童に背を向け続けてはいけないな」などと思ってしまう。3 組では、子どもたちが目を輝かせて先生の話に聞き入り、4 組では、あえて先生が声を潜めることで、子どもたちの静かな集中を引き出していた。

今日もひとつひとつの教室で、さまざまな出来事が起きていて、ふたつとして同じ教室はない。誰かの人生の転機になり得る、この新しい職場の教室で、私自身も一人の教員として楽しく、そして真摯に仕事に向き合っていきたい。

(所員／はやさか・めぐみ)

歌と歌文化からみる東アジア

曹 咏梅

2026 年度に着任いたしました曹咏梅と申します。経営学部では中国語を担当しております。今回は、自分が研究の道に進んだきっかけと、自分の研究について紹介したいと思います。私は日本の文化に興味を持ち、中国の大学では日本語を専攻しました。しかし、当時はインターネットもなく、テレビや大学の授業を通して日本を知ることしかできませんでした。あまりにも情報が少なく、自分の好奇心を満足させることができませんでした。「百聞は一見に如かず」というように、日本という国を実際に見てみたいと思い、大学 3 年の時に日本へ留学することを決めました。

日本の大学では日本文学を専攻し、恩師の『万葉集』の女歌に関する授業をきっかけに、『万葉集』に興味を持つようになりました。『万葉集』における女性歌人の恋歌を、中国や朝鮮半島の詩歌と比較しながら、東アジア文化圏の枠組みから捉える授業は、とても刺激的で新鮮でした。その後、大学院に進学する際には、『万葉集』を研究することを決めました。一つは、最古の歌集にこ

そ、日本の原初的な風土や文化、日本人の情緒が集約されていると思ったからです。もう一つは、当時は日本の上代文学を研究する中国留学生が少なかったため、将来的にはむしろチャンスがあるのではないかと考えたからです。しかし、今になって振り返ると、必ずしもそうではなかったように感じています。

私は『万葉集』と中国文学、中国少数民族の歌文化を比較しながら、歌の生成問題や歌垣・歌掛けといった歌文化について研究しています。古代日本の歌垣は上代文献に断片的に記録されており、そこから全体像を把握することはできません。日本では歌垣はすでに残っておらず、秋田や奄美などの地域にわずかに歌掛け文化が残されています。一方、中国では西南・西北の少数民族地域には今なお歌垣や歌掛け文化が継承されています。私はこれまで主に中国貴州省のトン（侗）族村でフィールドワークを行い、歌謡や歌文化について調査してきました。

文字文献による歌の研究は日本では『万葉集』、

中国では『詩経』に遡ります。しかし、日本も中国も『万葉集』や『詩経』以前から、人類の歴史とともに歌は存在したはずであり、それがあつた段階で歌われる歌から記録される歌になりました。歌の生成問題を考えるためには、人はなぜ歌を歌い、どのような音楽性や文学性を形成したのか、どのような場で歌われたのかなどを解明しなければなりません。このような問題を考えるためには、歌の源流へ遡ることが必要であり、その際に一つのモデルとなるのが無文字社会に生きてきた民族の歌文化であります。私はこれまでトン族の歌謡や歌文化を比較材料として取り上げてきました。かつて文字を持たなかったトン族は、民族の歴史や文化、生産の知識などをすべて歌によって伝えており、歌は生活の一部となっています。今でも客を迎える儀礼的な場や、「行歌坐夜」という妻問いの場、酒宴などで歌を掛け合う習俗

が残されています。こうしたトン族の歌世界には、文字に記される以前の歌の様相を見ることができ、そこには歌が生成される手がかりが隠されていると思います。このように、歌の生成問題は文字文献による考証の上に、非文字世界の伝承を理解してはじめて見えてくると考えています。

トン族では主に口承によって歌が伝えられてきましたが、ある段階から民間では漢字を習得した歌師が漢字表記を用いてトン音を表し、歌を記録するようになりました。その表記法には、古代日本の『万葉集』や『古事記』歌謡、朝鮮半島の郷歌に通じるところがあります。こうした関心から、近年はトン族の歌文化をはじめ、東アジアにおける歌と漢字表記のあり方や、喪葬習俗と歌などをテーマに研究しています。

(所員／そう・えいばい)

国際経営研究所からのお知らせ

■ 2026 年度研究所所員の構成数 (4/1 現在)

所員 (専任)	41 名
特任教員	7 名
特別所員	6 名
客員研究員	29 名

<2026 年度新任教員のご紹介>

- ◆ 中野 貴元 助教 (会計史)
- ◆ 早坂 めぐみ 准教授 (教育社会学/教師教育/教育産業)
- ◆ 曹 咏梅 特任准教授 (日本上代文学/東アジア比較文化/中国少数民族歌唱文化)

■ 2026 年度研究所常任委員業務

所長 青木 宗明

常任委員 (4 名)

- 足立 英彦 <研究事業担当>
- 石川 貴幸 <出版担当>
- 南雲 智映 <地域連携事業・HP 担当>
- 王 中 奇 <広報担当>

■ 2026 年度共同研究プロジェクト/新規 4 件

研究期間：2026 年度 - 2028 年度

- ◆ 「静岡県富士市における海外技術移転と地域振興—グローバル価値連鎖と地域アンカリングの視点から—」 / 代表：王 中奇
- ◆ 都市における循環型社会と実践知の形成に関する研究 / 代表：道用 大介
- ◆ 文化人類学と経営学の融合に関する基礎的研究—「民」と「企業市民」の概念研究を通じて— / 代表：小島 大徳
- ◆ 世界観の一貫性がブランド評価に与える影響 / 代表：津村 将章

■ 国際経営フォーラム No.37 原稿募集

テ マ：『激動の世界と今後』

申込締切：6 月 30 日 (火)

原稿締切：9 月 30 日 (水)

査読の場合は 9 月 18 日締切



申込は上記 QR コードからお願いします